

母の受難時代

「幼時の追憶」、その七

曾 根 保

母の手

某婦人雜誌には毎月、名士の「母を語る」記事が載つてゐる。私は興味深く拜聴してゐるが、いつぞや、詩人西條八十氏が貧しい母の姿を描いて居られたのに接して、感慨無量であつた。西條氏の令嬢は、目白の女子大學でお教へしたことがあるので、今は裕福な家庭のその愛嬢さ、嘗ては赤貧洗ふが如しさいふほさの詩人の母上さを對照して、母の力をしみじみ感じたのであつた。時、あたかも「母の日」さいふ今日、私は西條氏の記事、その他を想ひ浮べて、自分の母に心からの感謝を捧げたい。西條氏がまだ幼い頃、母の掌に觸つて、その表皮が何かの皮のやうに堅く、荒れてゐるので、その譯をきかされたところ、母なる人が言はれるのに、貧乏をして、お前を育てるために苦勞したから、こんな手になつたのだ、さ。かういふ話なのである。私は自分の母の手が、西條氏の母上のやうに荒れてゐるか、さ

うか、特別な記憶は無い。しかし、苦勞をした世の母の手がこんな風に荒れてゐるものかは想像に難くない。家にゐた女中の掌が板のやうに厚く、私共が持つここの出来ないほさ熱いものをも平氣で扱つてゐたのを知つてゐる。私の母の手がそんなに堅くはなかつたにしても、幼い西條氏が、その譯をきかされた時の心配顔が、私には十分呑み込めるし、また、その後、少年、青年の西條氏のすべての行動に、いつも「母の手」が強い感化を與へ、終に今日の氏をあらしめたことを少しも不思議ださは考へない。

掌はさもなくも、私の母は生きんがため、否、子供を生かさんがため、あらゆる辛慘を嘗められたのである。水道町の店を引揚げる頃であつたと思ふ。母はある夕方、私を連れて、何處か、關口か、高田老松町の邊へ出かけられた。何でも立派なお邸である。暗い門の前で私は暫く待つてゐた。するに母は元氣な顔をして出て來られた。その翌

日、私は母が犬養さいふ人の邸へ女中頭さして奉公されるのだ、さいふこを知つた。その當時、別に母に對して、相濟まぬこも、何こも思はなかつたのであるが、後年、私達は當時の母に對して、心から相濟まぬこだこお詫びの氣持をいだし、さうしたら母をお慰めするこが出来るものだらうかこ苦心した。犬養さいふのは故木堂犬養毅氏のここである。母は數日、或は十數日犬養邸に住込まれたが、さうしても子供のここが氣になつて眠れない、仕方なしにお断りして歸つて來た、このお話であつた。尊い母を奉公にまで出させた私達!!いくらお詫びをしても、お詫びのしやうはない。強い「母の手」に限りない感謝を捧げずにはゐられない。

袋町に移る

水道町から神樂坂の上、袋町に引越したのは、やはり私の尋常二年生の時である。今日の日活館から二三軒上手の曲り角の一割に下宿屋があつた。母は、そのの權利を譲受けて、いよ／＼下宿業を始められたのである。數人の支那の留學生がゐた。角の洋館には上等の下宿人がゐたらしい。部屋を覗くこ、贅澤なバネ仕掛の機械體操の道具や、鐵亞鈴が見えてゐた。いつぞや、道路に面した窓から賊がはいつて洋服類を持つて行つたこかで、刑事なるものが、度々やつて來たのを覺えてゐる。廣い臺所で、女中が澤山お膳を並

べてゐた。商賣は相當盛であつたやうである。時には母が鐵道唱歌や軍神廣瀬中佐の歌を歌つてゐられた。苦しい中にもつぎめて朗らかさを保つてゆか／＼してゐられたものこ信ずる。二階の支那の留學生に書や繪の上手なのがゐて、私にも數枚繪をかいてくれた。赤鬼の繪は今でも保存してゐるが、繪も字も見事なものである。何さいふ名の人か、覺えてゐないが、私が今でも支那の人に好意がもてるのは、幼い頃の想出が無意識に働いてゐるのかもしれない。津久土小學校の同級生に特に私の好きな友達が二人ゐた。一人は田淵鑑さいふ名の級長で、今一人は趙某さいふ支那の少年であつた。趙さんは球投が上手だつた。ある日誘はれるまゝに、その家にお伴をした。麻布の邊のやうに思ふが、大きな邸宅で、二階にはピアノさいふ珍しい樂器があつた。支那の油っこいお菓子も嬉しかつた。家の婦人は纏足をしてゐたやうに記憶してゐる。背の高い、人好きのする少年だつたが、今は何處にゐるこさやら。田淵君は私が轉校した時級長だつたのこ、同じ袋町の、しかも、すぐ近くに住んでゐたので特に親しかつた。私はすぐ副級長さいふ名を貰つて、田淵君について歩いてゐた。實際不思議なここであるが、私は何處の學校へ轉校しても、暫くするこすぐ副級長を仰せつかつた。次の學校でも、その次の學校でも、また次の中學校でも、その次の中學校でも、ま

づ副級長に任命された。さういふ因縁なのであらうか。私さいふものが、一番それにふさはしいのであらうか。津久土小學校では、級長に榮進する程長く居なかつた。しかし、私の追憶はこのあたりからやゝ明瞭になつて、少年保の姿が浮び上つて來るのである。

袋町にゐた頃の私に關係のある事柄は餘り芳ばしくない。或る時、箆筒の引出にあつた五圓札を無斷で持出した。當時毘沙門様の前にあつた勸商場で、金色の泥の恵美須大黒を買つて、家に持つて歸つたが、隠し場に困りはつて、袋町の上の方、突當つて右へ、今の電車通りへ降りる坂の深い草原の中へ投込んでしまつた。後年、帝大へ入學したその四月、兵營生活で友人さなつた小説家の細田民樹氏を、丁度この坂の上の下宿屋に訪ねた時、ふさ往年の恵美須大黒を想出して、實に何さと言へないものを感じた。五圓の残りのお金をもつて、更に氷屋に飛込み、氷あづき

か何かを食べて、いゝ氣持であるところを徹兄に見つかつて、連れて歸られた。不思議なことに、お金のこまは一言も言はれなかつた。たゞ半日出歩いて、夕食も食べてゐないので、母が心配して、兄に探がさせてゐられたのださういふ。使つたお金は五六拾錢だつたさ思ふが、何れにしろ、感心した話ではない。この頃から、私に就いて、ぼつ／＼、母の心配が殖えて來たのではあるまいか。

家の前にも下宿屋があつて、同級生がゐるが、その親爺がいつも帳場で、むづかしい顔をしてゐるので、頭から、ここの息子には好感がもてなかつた。暫くして、私達はまた引越すこゝになつた。

第六天町時代

小石川第六天町へ何故移つたかも、私には分らない。今の區役所の下の谷のあたりであつた。江戸川から行くこゝ、交番があつて、その横から谷にはいつて行くのである。門構の中に數軒の借家があつたが、はいつて右側二軒目位だつたさ思ふ。今でもその門は残つてゐる。當時は日露戦争直後で、小石川の火藥庫と砲兵工廠との間にはトロッコが通つてゐた。白い旗か、赤い旗か、はつきりしないが、ひつきりなしに彈藥を積んで往復してゐた。すぐ近くに高崎さいふ知名の銀行家の邸があつて、よくこゝの庭園で遊んだものだつた。この家に鼎兄と同年輩の息子さんがゐた。後に一家離散の折、鼎兄はこの家に書生として住むやうになつたが、日頃遊びに行つて顔見知りになつてゐた關係だらうさ思ふ。この頃、迪兄の病は次第に悪化して、私は毎日藥取りに行つた。泣き面に蜂さいふ言葉があるが、非常に困つてゐたこの時、泥棒がはいつて、何か持つて行つたさいつて大騒ぎをしたこゝがある。泥棒は隣の邸の扉へ、家の雨戸を立てかけて、そこへはいつたのだつた。足跡

のついた臺所の兩戸を、巡査が調べてゐた。僅かの間に、これで二度泥棒に見舞はれたわけである。

私はこゝから津久土小學校へ通つてゐたが、二つの大きな事件が想出される。一つは月謝二拾錢を誤魔化した件、一つは着物の片袖を紛失した件である。月謝を納めなければならぬのを忘れてゐたため、すぐ學校の下の、母の友人石田某の家へ借りに行つた。快く貸して貰つて納めたのはよかつたが、その日、體操の時間に數人の者が教室に居残つて何かしてゐた時、追つかけられたか何かの拍子で片手を硝子戸についたため、ガラスを一枚毀してしまつた。大きな音をたて、ガラスは落ちた。「僕ぢやないよ、僕ぢやないよ」友達は責任を回避した。そのうち、關根先生さかいふ受持の先生が怖い顔をして來られ、頭から怒鳴りつけられた。私はちゞみ上つてしまつた。今迄に經驗したこゝのない不祥事件なのである。たゞ茫然と立つてゐた。何でもほか／＼と幾つか殴られたやうに記憶する。早速辨償せよと言はれるので、家に歸つて二拾錢頂戴した。ガラス代と言はず、恐らく月謝と言つたのであらう。二度月謝を請求したこゝになるので、事の真相は直に曝露してしまつた。

も一つの片袖事件の方はもつと深刻である。或る日、遊動圓木で落し合ひをしたが、不幸にして、私は敵に片袖をもぎ取られた。綿の浴衣地であるから、暑い頃のこゝであ

らう。その片袖を怨めしさうにもさにくつゝけてみたり、懐へ入れてみたりして、家へ歸つてからのこゝを心配してゐた。夕方みつこもない風をして、家へ歸つた。さて懐の中の片袖を出さうとしたが、何時の間にか消え失せてゐる。驚いたのは私ばかりではない。母も呆れたさいふ顔であつた。すぐ引返して、道々入念に調べたが見當らなかつた。その後、この着物は中學時代まで着せられたが、着るたびに不注意を繰返されて、まゝこゝに痛い思をしたものである。

母や兄達が一生懸命で内職をして居られたのは、この頃である。第六天町に至つては、一家愈々窮乏の極に達したと思はれる。皆が袋張さやらをしてゐられたが、私にはそれを手傳つた記憶さへもない。母の必死の努力も甲斐なく、遂に上京三年未滿で、一家はまたもや離散、母は都落ちをされなければならなくなつた。病中の迪兄、給仕の徹兄、そして鼎兄の三人を残して、私を連れ、寒い年の暮に母の郷里に近い東宇和郡俵津村へ下つて行かれるこゝになつた。幼な心の私にも、これは決して楽しいこゝではなかつた。後年、兄達からよく「お前位合せなものはない。いつもお母さんの側にゐたのだから」言はれたが、實際その後三人が力を合せて自活の道を講じた涙ぐましい話を聞いて、自分の苦勞のまだまだ足りないこゝを痛感した。兄

第三人が神樂坂で夜店を出したとき、船兄が米屋に丁稚にいつて荷車を曳いた話なき、今日でこそ楽しい語り草になつてしまつたが、當時、母の心をされほき痛めたときか想像だにも及ばぬことであらう。

楽しい少年時代

汽船はその頃俵津村へは寄港しなくなつてゐたので、次の港、吉田で下船した。寒い朝であつた。小さい川の端の「うさんや」で朝の腹ごしらへをして、人力車に乗つた。私は母の膝に乗せて貰つた。二里ばかりも行つたのであらう。筋へさいふ村から小舟に乗つて對岸へ渡つた。寒い海であつた。母と子と抱き合つて小さくなつてゐた。そこから、小さな山を一つ越えて目的地の俵津村へ着いた。村役場の何十疊がある寒々とした二階に通された。そして數日後に、役場の裏の伊藤さいふお庄屋の離れに移り住むことになつた。つまり寄るべない母と子は亡父の昔の友、當時俵津村長をしてゐられた大野氏に引き取られたのである。この離れの表は銀行になつてゐた。裏には淺い井戸があつたが、飲み水にはならないので、お庄屋の井戸まで毎日汲みに行かねばならなかつた。小さい私が大きい桶を天秤でかつぎ、びちや／＼音を立て、不器用な足ざりで水を運ぶ恰好は、今想出しても本當に可憐な姿である。そして江戸ッ子辯で「重くつてやりきれねえ」さか何さか言ひなが

ら、母の手助けをした可愛い、當時を、お庄屋のおばさんば、その後よく話してゐられた。

小學校へ出た初めの日、私は黒板に自分の名を書かされた。先生は私を皆に紹介して、仲よくするようにと言はれた。東京から田舎へ移つた私には、學校も、生徒も汚く見えて仕方がなかつた。しかも私は耳だれの女の子と並ばされて、臭くてぎうにもならなかつた。この頃、巖谷小波の世界お伽噺なきが流行して、私は日が暮れて、字が見えなくなるまで讀み耽つたものだつた。それに、東京から日本少年や海國少年さいふやうな雑誌を徹兄から送つて貰つて愛讀してゐたので、田舎の子供よりは物識りさいふところだつた。空氣銃が欲しくて駄々をこね、箱の中へはいつて、買つてやると言ふまで出ない頑張つて、母を困らせたことがある。丁度そこへ大野の叔父が来て、「あの子はまた何をしきるんぢや」口髭をひねつて母にきかれた。その時は私も少からず恥かしかつた。箱の中から出ることも出来ず、全く手も足も出せなくなつた。やがて徹兄から細長い木箱の小包が届いて、中には黄色い木綿で包まれた、夢にまで見てゐた空氣銃がはいつてゐた。恐らく村の子供も初めて見た空氣銃であらう。これは、想ふに、少年雑誌の誘惑的廣告に釣られて欲しくなつたものに違ひない。ところが、私はこの空氣銃で小鳥を一羽も射落したことがな

い。たゞ電信柱や、白い碍子をねらつてばかりゐて、雀さへも落すことは出来なかつた。後年、兵隊になつて、射撃が中隊中でペリから二三番さいふ成績だつたのも、思ひ合はずに不思議ではない。

迪兄危篤の報

その頃、病弱な迪兄も東京を去つて、松山に近い伊豫郡上灘の叔父の家に寄寓し、身體を養つてゐた。叔父が醫者であつたのミ、三町歩餘の林檎山を經營してゐて、その監督が入用であつたため、引取られたのであらう。ミころが、病が急に悪化し、危篤の報が來たので、母は私は船で急行した。伊豫灘は大時化であつたが小蒸汽は通つてゐた。母はこの時通船から投出されて、ずぶ濡れとなり、叔母の着物を借りて着られたが、實際は、まかり間違へば大浪にさらはれるミころであつた。兄は咯血がつゞき、全く危険であつた。私がるても何の役にも立たぬのミ、病も長びきさうで、母の歸られる日もはつきりしなかつたので、私だけ一先づ先へ俵津へ歸るミこになつた。叔父の家はお金持で、綺麗で、何となくいゝミころさいふ感がした。それに食べ物も贅澤で、私はこの家が好きであつた。俵津に歸つて、母にいひつけられた通り、獨りで御飯を炊いてみた。その頃は石油ランプで、毎日ランプの掃除もしなければならなかつた。御飯は一二度こがしたが直ぐ上手に炊けるや

うになつた。火吹竹でブーブー吹いて火をおこしたものであつた。うまくゆかぬ時は家中煙だらけにして、向ふが見えぬやうな時であつた。呼吸が苦しくて、戸外に一寸飛出して呼吸をしたミこもあつた。これは尋常三年生の時であるが、年はゆかなくミこも、やらせればやれるものである。

夜、獨りで寝るのが淋しくて、一年下の立花茂夫さいふ友達を呼んで來て泊つて貰つてゐた。この頃二人で新聞を發行するのださいつて半紙に色々なお話や出來事を書いて、友達に見せてゐた。それで夜は編輯で忙しかつた。ミころが、或る晩、この少年が便所に行つたが、ランプを持つて行かなかつたので、勝手が分らなかつたミこ見えて、糞壺へ落ち込んだ。引揚げて、裏の井戸で洗つてみたが、ミこにもならず、たうさうその晩は泊らずに歸つて行つた。しかし、これが新聞の特種ミこなつて評判を得たのであるが、本當に臭い話であつた。

私が少年らしい少年時代を過したのは、この俵津村での三ヶ年である。即ち三、四、五、三學年を過したこの港の村は私にまつて一番楽しい時代であつたさいふべきであらう。しかし、母にまつては必しもさうではなかつた。受難時代はまだまだ容易に終らなかつたのである。